

『 鏡池 Hide Nasu - 東西水盤の合間 』

(フランクフルター アルゲマイネ ツァイトウング:21.09.2020)

浅い水、鏡、その曇った面に浮かぶ影、その影はともすると周囲の様子がほんのわずか変っただけで消え去ってしまう。正方形の木製の水盤に生の源である要素、水が張られている、しかし水は時と共に蒸発して、蠟で防水されている水盤の底にその名残だけを留める。水の残滓、カルキの痕跡、自然に出来た紋様だ。この1950年生まれ、長年フランクフルトに在住、制作するHide Nasu の作品に我々は当然、彼の出自、日本の伝統を感じ取る。制約、集中、鮮明、特有な画法、自然の抽象化、ミニマルな変化で成り立つヴァリエーション等、すべて当たり前のことのように軽快な手さばきで制作されているが、実際には厳しい法則に基づき秩序がある。これは西欧の非具象の近代芸術をも特徴づけるものだが、それはまた、往々にして東洋を模範としてるし、むしろ日本の禅庭、茶道、俳句の原理にならっているものでもある。Hide Nasu の制作はオブジェクト的なもの、グラフィック、絵画と多岐にわたるが、彼はしばしばこれらの作品が互いに調和、呼応するように一つのインスタレーションとして展示している。

“鏡池”と題されたこの展覧会では、この異文化の橋渡し役ともいえる芸術家の豊富な作品群が、個々の作品はそれぞれ作品としての自からの存在性を保ちながら、それら全体の凝縮、簡約であるかのように、あるいは記号として体験されるように展示されている。構図は基本的に幾何学的、彩色は一定のトーンに制約する、という制作の姿勢は一見、まず一步引きさがるという控えめさを示唆するが、作品の抽象性においては、自律的芸術の要請を一層泰然、確固として証している。ここではHide Nasu の感性が巧みに発揮されて、鑑賞者を否応なしに引き付ける。

彼が日本の漆、木、蜜蠟をその素材として使い、しかも工芸作品によくある疑似的完璧なモノに終わるのではなく、むしろ事象の変化のプロセスそのものを精妙な仕方で形象化しているのだという事が、彼の作品を特別に魅惑的にしている。そこには自然が働いている、つまり時間が。しかしそれは破壊的なことではまったくない、変転は厭うべきことではなく、破壊的でもない。脆いもの、透明なもの、それは人の生にも関わるものであり、Hide Nasu の制作素材である。すべての秩序は暫時的であり、すべての確かと思えることも動揺する。移ろいやすさ、それが物の本質である。

ミハエル ヒアホルツアー